古文書編纂資料に基づく福岡県耳納山地域の土石流災害の抽出

九州大学　正会員　○西山　浩司，広城　吉成，非会員　脇水　健次
活水女子大学　非会員　細井　浩志
東日本旅客鉄道株式会社 非会員　上山　裕太

１．はじめに

近年，2009 年 7 月 21 日の防府豪雨，2013 年 10 月 16 日の大島豪雨，2014 年 8 月 20 日の広島豪雨などで土石流が発生し，深刻な災害を引き起こした．そのような災害に備えて，平常時から居住地域の災害特性を十分認識して，地域住民が主体的となって，緊急時の避難対応を考えておくことが重要である．そのためには，地域の居住者が，過去に土砂災害が起こった場所がどこなのか，そして，どの程度災害リスクが存在するのかを調べられる環境が必要である．近年は，インターネットの急激な普及に伴って多くの気象情報や災害情報を取得できるようになり，災害被害軽減のための有益な情報が増えてきた．一方，それ以前の何百年にも渡る災害資料は少なく，地域の過去の災害履歴をインターネット上で検索してもほとんど出てくることはない．災害は同じ地域に頻繁に起こるわけではないため，地域住民の記憶の中に災害の経験が乏しく，災害リスクを具体的に認識することは難しい．そこで本研究では，地域の古文書資料を活用して，過去の土石流災害の特徴を抽出し，福岡県筑後地方の東西に延びる耳納山周辺地域における土石流災害のリスクについて考察する．

２．古文書編纂資料

耳納山周辺地域における土石流災害を抽出する資料として，福岡県近世災異誌（1992 年　立石碧著）を利用する．その編纂資料は，慶長 19 年（1614 年）から慶応 3 年（1867 年）までの福岡県の災害を記載した資料で，筑後地方の災害が詳しくまとめられている．これは，秋月の災害関連の古文書「望春随筆」や寺社，武家，庄屋などの地域の古文書を収集して編纂した貴重な災害資料である．気象の部だけで 500 頁以上もある．一方，明治以降の土石流の記録は吉井町誌を利用した．

３．江戸時代の土石流災害の記載内容

福岡県近世災異誌によれば，筑後地方では多くの土石流災害の記録（山汐の記述が多い）があり，特に東西に走る急斜面の耳納連山に沿って土石流が多く発生していることがわかった．そこで，浮羽市の耳納山麓（吉井町の屋部，延寿寺，安富，尾形，千代久地区）における災害に対象を絞って，過去の土石流災害の記録について検証した．過去の土石流災害と福岡県うきは市総合防災マップを重ねた結果（図 1）から，最近の目立った土石流災害はないが，1946 年（旧：西屋形村）と 1953 年（旧：延寿寺村）に土石流が発生している．江戸時代まで遡ってみると，1720 年に西屋形村・安富村・千代久村・屋部村で，1802 年には尾形村・安富村で，さらに，1851 年に延寿寺村で大きな土石流災害が発生しており，同じ地域に過去五回に渡って土石流災害が発生したことがわかる．また，その地域は土石流の警戒地区を含んでいることもわかった．

特に，享保 5 年（1720 年）7 月に発生した土石流災害では，望春随筆の「一村民家竹木迄洗埋、大石流出及亡所申候」，「安富村・千代久村・矢部村之内山崩谷筋より大石洗出，三ヶ村之内谷四ツ出来仕候」という記述から，3 つの村が流木や大きな石に襲われて全滅し，新たに谷ができたことが伺える．これは土石流の発生を物語っている．その影響で，安富村で 3 名，隣の延寿寺村で 17 名，屋形村で 6 名の死者が出ている．その際の豪雨の推移を見てみると，秋城御年譜より「六月十九日より同廿一日迄，夜白大雨降，片時も不得止降詰申候故，五十年以来之大水出申候」，望春随筆より「六月廿一日巳ノ刻より大雨，尤前日より大雨雷鳴る，

キーワード　土石流災害，山汐，福岡県近世災異誌，古文書
連絡先　〒819-0395 福岡市西区元岡 744　九州大学大学院工学研究院環境社会部門　ＴＥＬ：092-802-3428

山鳴と雷鳴にて・・・厳敷大雨丑刻高水山汐」，医王山南林寺縁起より「六月廿一日山汐洪水所々山崩れ石流る」，「六月廿二日より天気晴朗なり，七月中旬に至りて雨更に降らず，田畑共に枯廃し粟既に生せず，これを嘆き苦しむ声日々かまびすしく」（それぞれの日時は旧暦）とある．即ち，新暦の 7 月 19 日より 3 日間に渡り，雷を伴う大雨が降り続き，土石流が発生した．その後，22 日を境に雨が降らなくなり，田畑が荒廃して主食だったと考えられる粟が取れなくなったと記録している．その後，別の記載では神仏に祈願，神社で雨乞いなども実施されており，生活が困窮したことが伺える．以上の記載から，梅雨末期の状態の前線が停滞した状態が 3 日間続いた後，梅雨が明けて，高気圧に覆われて渇水状態になったことが読み取れる．

以上のように，耳納山麓では土石流災害が過去に頻繁に起こっていることがわかったが，60 年以上目立った災害が起こっておらず，災害の記憶が風化している可能性がある．西屋形区公民館の近くには「山潮記念碑」という碑文がある．吉井町誌によると，この碑文には昭和 21 年の吉井地区の災害について記載されており，「昭和二十一年七月七日，午後から降り続いた雨は，八日未明に至って俄然豪雨となり，諸川刻々氾濫して，各地の被害の報は頻々と伝えられた．午前八時頃，突如，当群落上方の山腹が崩壊して…」という当時の災害の状況と「孫子は，先人の不屈愛郷心を受け継ぎあらかじめ不測の事態に備え，困難に対処する覚悟を忘れるな」という災害に対する教訓・心構えが記されている．しかし，その碑文に記載された内容は苔むして読めなくなっており，現地の住民の方にお話を伺うと，これらについてほとんど知らないという返答であった．また，インターネット上でも，過去に起こった土石流災害を詳しく記載した情報はなかった．

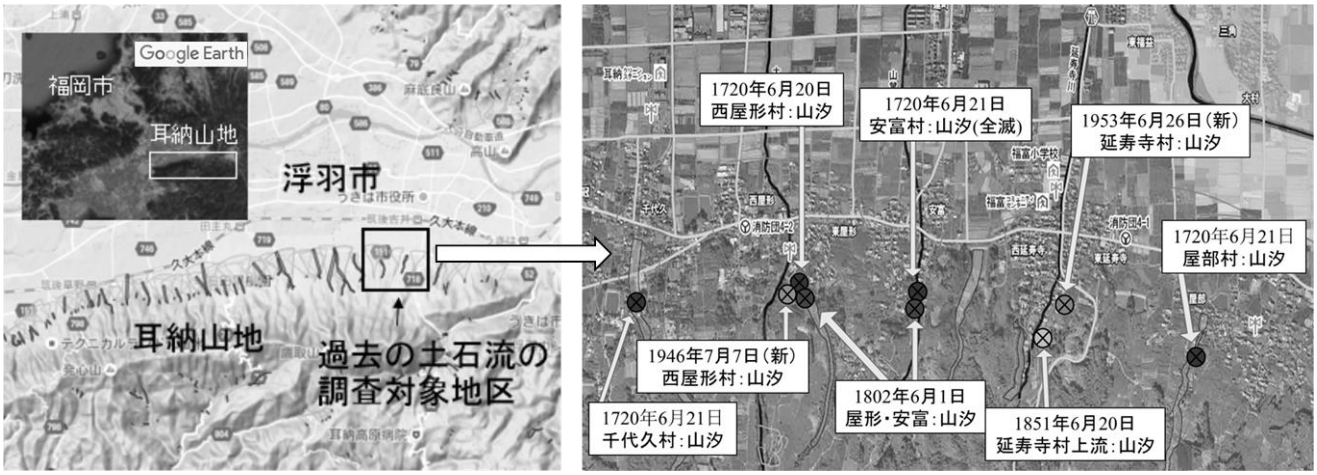

図 1　浮羽市耳納山麓で起こった過去の土石流災害の発生地域．左図は，福岡県「土砂災害警戒区域等マップ」：http://www.sabomap.jp/fukuoka/，右図は，うきは市総合防災マップ(福岡県浮羽市) http://www.city.ukiha.fukuoka.jp/kiji/pub/を重ねている．

4．結論

浮羽市の耳納山麓（吉井地区）を対象に過去の土石流災害を調べた結果，ここ数十年，記録的な土石流災害はなかったが，昭和 20 年代に 2 回，1700 年以降の江戸時代に 3 回の土石流災害があった．特に，享保 5 年に発生した土石流は，数十人の犠牲者を出す深刻な災害であり，吉井地区のみでなく，筑後地方一帯に大きな被害を及ぼした．実際に，現行の土砂災害危険箇所マップと重ねてみると，過去に土石流災害の影響があったと推定される場所は，現在においても土石流災害が起こるリスクが存在する地域であることがわかった．しかし，インターネット上でも，過去に起こった土石流災害を詳しく記載した情報はなく，耳納山麓では 60 年以上目立った災害が起こっておらず，災害の記憶が風化している可能性がある．従って，地域の公立図書館や歴史資料館等に紙媒体として眠っている過去の災害記録（町史や古文書など）を掘り起こして編纂・解読し，インターネット上に公開できるようになれば，地域住民が土石流災害の危険性を認識する機会を持つことができ，今後の豪雨災害発生に備えて，平常時の地域防災教育ツールとして役立てていくことも期待できる．